

全共闘運動の質と新たな学生運動

全共闘運動の最低限総括

法政大学二部アナ研

一 全共闘運動の登場

「全共闘運動の混迷と停滞」という言葉を聞き始めてから、少なくとも四年はたつ。そのことは無政府主義者たらんとした者にとつてもまた、「アナキズムの混迷」として現出してきたわけだし、マルクス主義として例外ではなかった。それはとりもなおさず、既成の一切の概念そのものが根底的に問われたものとして全共闘運動があつたということに他ならない。何が破壊され、何が真に生き残るべきなのかを暴露しつつ踏み絵として、全共闘運動はあつたと言える。

一九六五年以降、帝国主義段階に突入した日本帝国主義は、ほんの二、三年後には、命運つきた資本主義国として、様々な矛盾をばらまき始める。そして、その中から様々な形で闘いが発生してくることになる。無党派もその中から、既成左翼諸党派を乗り越えたというよりは、諸党派とは全く無縁なところから誕生してくる。その過程をまづ見ておく。

した要因を痛苦に検討していく時、我々の中に「連合赤軍的」な質を包含していなかったとは誰にも言わせない。すなわち全共闘運動の自然発生性によるエネルギーは、それは熾烈ではあつたが、それ自身への昇降によつて自ら解体せざるを得ない質をもた内包していたのである。そのような中から純粹に軍事的な総括をなし切つた一つの部分として、連合赤軍は位置するのである。

現在日帝は、アジア侵略反革命戦争に向けた国内の帝国主義的総再編をなし切らんとし、治安体制の更なる強化を目論み、いくつかの分野では既に、それは進行している。そのことは日帝自身の内包する帝国主義としての危機、すなわちそれ故の諸矛盾の激化の中でブルジョアジーはブルジョア政治における相対的安全を目指しているわけで、逆にプロレタリアートの側ではその政策の何よりの犠牲者としてしか存在し得なくなることと他ならない。その相克の中で、更なるブルジョアジーの攻撃として、国内総再編があるのである。それに対するプロレタリアートの側からの反撃は、一つには日本共産党、社会党―総評という体制内の「反体制」（それさえ言えなくなっていることは、日共のこの間の「プロレタリア独裁」↓「プロレタリア執権」・「ディクタトゥーラ」という、マルクス主義の本質をめぐる問題を見ても言えると思う。すなわち、いわゆる既成「左翼」としての社会民主主義的潮流としてそれらはあるのだろう。しかし、それらが何もし得ないだろうことは、二・一ゼネスト逃亡を初めとして、日共の綱領改正（先刻の「プロ独」↓「プロ執権」、社党の「反戦」派バジ等を見れば、また議会主義ズブズブのカウツキー主義者としての本質を見れば明らかである。ブルジョアジーの支配の道具として民主主義はある

連合赤軍の浅間山莊銃撃戦―肅清（事件）を小ブル急進主義として語るべきでない。このことをまず確認しておきたい。「学生運動」の範疇にある革命運動の一つの結果としてそれはあつたわけだし、日本赤軍、RGといった革命運動そのものを目指して行く部分とは少し違つた意味で、それは学園闘争の中から生まれ出て来た一つの闘いの形態としてより近いところにあつた様に思う。自らの立場性抜きに語るならば、それ故の限界性ということは指摘できると思うが、肅清に關してはここでは無関係だと思ふ。当然権力との熾烈な対峙の中で、決定的に闘い抜けるか否かは問われるべき問題であつたろうし、それ故にこそ「同志殺し」の痛苦を乗り越えてもなお突き進まなければならぬ地平に、彼らは数年も早く到達していたと言えるだろう。

さて、六七年10・8羽田闘争を契機とした六〇年代後半の革命運動は、学園闘争―全共闘運動の創出へと深化発展し、七〇年安保―沖繩へと登りつめていった。そのような中で六九年一月東大決戦を迎え、結果的には敗北していった。その一つの総括として、あの連合赤軍の闘いがあつたのである。全国学園―政治闘争のその敗北をもたら

のであり、プロレタリアートを骨抜きにし、矛盾の一切を議会へとたれ流すことにより、あらゆる反発をかわしていくのが、今の支配の形態であり、それが見抜けないままに、あたかも議会で多数派として登場すれば社会の構造が変わるかのような幻想を与える彼らの犯罪性は重大である。

一方、六〇年安保を前後して登場した「新左翼」諸党派は、一切を中央権力闘争に流し去り、個別闘争を放棄（逆に個別闘争への党派的介入という形で回帰はあるが）去ることにより、逆の側からの大衆引き回しを支えるものとしてしか存在し得ていなかった。

たとえば、安保ブントの総括をなし切つたはずの革共同Ⅱ中核派は、日共の裏返し理論としての反帝反スタを唱えることにより、政治的に一面的な総括しかなし切らなかつたが故に、七〇年安保決戦を回避し、七二年武装蜂起へと大衆を幻惑していくといった無責任さはいい一例である。

次いで戦後からの運動を簡単に見ておこう。

敗戦直後の日本における革命運動の主流は言うまでもなく日共であつた。それが二・一ゼネストからの組織をあげての逃亡劇による米占領軍Ⅱ解放軍規定の破産に打ち続き、当時右派の牛耳る日共に対するコミンホルム批判を経て四〇年代後半から五〇年代にかけての武闘路線への急転回、五五年の六全協によるそのまた大転回と清算、さらにはスターリン批判といった流れの中で、日共がとんだ「前衛党」であつたことが明らかになつた。不可侵の「党」の神話はここに至つて、全くの「神話」だつたが故に、みごとに崩壊したのである。

さて、当の日共内部においてもそのような日共そのものに対する批

判が、明確に分派として形成され、それらを中心に共産同Ⅱ社学同として登場してくる。一方、外部においても「共産主義国」としてのソ連、「前衛」としての日共という構図の破産を見抜いた部分が、スターリン批判からトロツキズムとの出会い、摂取を経るうちに、日本トロツキスト連盟（→革共同）の形成へと登りつめていった。それは初期マルクス、トロツキズム、宇野経済学を基礎として、真の前衛党を目指して永久革命論、疎外論を大胆に提起していった。ただ反スターリン主義として登場はしたものの、スターリン主義そのものの明確な把握と解明をなし切る中からの規定を決定的に欠いていたが故に、今や「反スタ・スターリニスト」としてしか存在し得ていないのが現状だろう。つまりところ大衆が党派自体から疎外されてしまうという構造をも、また彼らは内包しているのである。それは未だ「真の」前衛党が日本には存在し得ていないということではなくして、「前衛党」方式の革命運動の構造そのものが、大衆の革命そのものからの疎外を起因するというふうに捉えることができる。それを指摘することでマルクス主義の首をハネたと思ひ込むのは早計で、一度闊いに決起した人間は、闊い続けるという一点において、もともと依拠していたはずの大衆と疎外し合うということになると言えるだろう。またそうであるならば、徹底的に大衆に迎合し、完全に大衆に受け入れられる言葉のみを発することによって、疎外を連帯に変え得ると思えない。一見疎外は存在しないように思えるだろうが、自己―他者の関係性、自己、他者そのものの変革のない闊いはもはや闊いとは言えない。ここで指摘しておくことは、少なくとも「前衛党」方式は確実に革命運動そのものから大衆の疎外を惹起せしめるし、それは党が党として確立

できないにしろ、自らが高まり、自らが闊いそのものの中から社会主義へと接近していったものであることを、それは何ら説明し得てはいない。その前に、彼らは党派としてさえ一般的には受け入れられていないということが、別問題としてあるが。

つまり、敗北の総括は単に「前衛」の問題ではないことを、これらは示しているだろう。その延長線上には、他党派の批判ではなく、それ以前のところで、他党派の否定のみを根拠とした運動しか構築し得ていないことをもつと早く知るべきだったのだ。しかし、六〇年代初頭には、まだこのことに気がつくようがなかった。

さて、安保闘争の敗北による全学連の崩壊後、その再建は三派全学連（日共Ⅱ民青の全学連再建は、すでに運動の質としては問題外なので触れない）として成し切られた。統一された全学連のイメージは、党派別運動体としてのボツダム自治会として固定化された。それが一丸となって六七年羽田、六八年佐世保へと軍団を進めていくのである。（党派別軍団の連合という形を持っていた時代）

一方、社会の全体として当時を見れば、経済的自立（帝国主義段階へと突入）を成し得た日帝の中で、ベトナム戦争を契機にベ平連（六五年くらいから）を初めとする様々な市民運動・地域住民運動がまきおこり、職場においても反戦青年会の結成等、大衆運動の大爆発があつた。

そのような中で、党派の中央政治権力闘争の形態を乗り込め、文字通り生活領域までをも包括した広範な反逆として無党派運動Ⅱノンセクトラジカルの登場を見るのである。

されればされるほど拡大されていくということである。

しかし、たとえば共産同叛旗派のように、革命（されるべき）主体の自立をかけて、擬制としての国家の幻想と格闘してみても、国家は共同の幻想のみで出来ているのではなくして、支配の様々な道具の組み合わせとして、物理的にそれを保障し得るだけの内容と力量をもって存在し得ていることを捨象している以上、一向に国家そのものの、権力そのものの闊いにアプローチし得ず、最も役立たずの党派としてしか存在し得ない部分もある。期日を定めて一斉に皆でソッポを向けばブルジョア体制は倒れるとでも言うのだろうか。

党派の登場というところから、党派に対する二、三の疑問点を出してみた。六〇年安保は、しかし、新左翼の党派の登場という意義という点では評価できるだろう。安保ブントⅡ共産同の闊いが、議会主義に横すべりせんとする社民潮流に解体され、意識的には「民主主義を守る」闊いとして歪曲されていったという敗北の総括として、マルクス・レーニン主義の哲学的深化を目指す革共同の登場により、自己否定によるプロレタリア的人間形成（黒田寛一）を目指す建党的闊いが始まった。しかしそれが、「真の前衛党がなかった」としか考えることが出来なかったが故に、今日なお前に指摘した様々な弊害をひきずってしまっているのである。

そのことをさらに展開しておくなら、典型的な例としてマル青同があげられる。彼らは9・16東峰十字路機動隊激戦以降の、三里塚における闘争の一定程度の敗退の原因を、相も変わらず前衛党がなかったことに求めた。しかし、三里塚の農民や闊いそのものが到達した地平は、もちろん支援という形で入った党派・無党派の影響は看過

ノンセクトラジカルの登場は、あらゆる既成の権威、機構そのものに否を唱えることにより、破壊し破壊しつづす闊いとして、自らの日常そのものとの闊いから出発して権力そのものに攻め登る、それ以前の闊いの中からは発想だにされなかった新しい情況と視点を大胆に提起していった。

それはひとり権力にとどまらず、既成の旧「左翼」、さらには新左翼諸党派をもまた試すものとしてあり、端的に言えば、闊いに決起した人間が正しいと思つていたことさえもが、また疑問の対称であり、破壊の対称でしかないことを感覚的に知りはじめた時代であつたと言える。マルクス主義も問われた、アナキズムも問われた、そして何よりも自分自身が問われたのである。

※ すでに気が付かれたと思うが、運動としてのアナキズムの陣営には全く触れなかった。六〇年代後半の闊いの中に、六七年ベ反委の日特金攻撃や、背叛社の闊いが足跡を鮮明に残しているが、それらへの言及は意識的に省いた。それらは、すでに数十年という単位で大衆運動、革命運動の地平から密教的転落という形で、マルクス主義のアンチとして生き残りはしていたが、それ以上ではなかった。以上の点を踏まえて、マルクス主義が無政府主義かといった問題のたて方ではなく、マルクス主義に水をあけられている現状を確認しつつ、マルクス主義に迫り、乗り込めて行くものとして自らの思想を対置して行かなければ、全くこの間の運動（論）の中ではとらえ切れないと思うからである。

二 全共闘運動とは何だったのか

初期全共闘運動は先刻見て来たような歴史性の中から、日本が既に帝国主義としてその本質を全面的に発現しつつあった時に、学生の様々な運動（「動き」といった方がまだ適確であるような質ではあったが）の中から即自的なものとして表われて来た。六〇年安保闘争が民主主義の幻想をみごとに打ち砕いたとするならば、それ以降の五年間はそのからの突破口を模索する時としてあり、既に登場を完了した諸党派が六全協ショックの悪弊から解き放たれ、暴力革命の思想性を再び獲得していく過程の結節点として六七年羽田闘争はあったと言える。しかし、無党派ノンセクトラジカルが、そのような「革命運動」の一環として登場したわけではもちろんない。矛盾があるから変革されなければならないということを確認すれば、それは当然のことである。ではどうやるかという段階で、党派なり運動体の問題が出てくるわけだから。

そのことは熱気の中で次々にあげられていった「要求××項目」の内容が、今にしてみれば当り前のことであり、にもかかわらずそれらを開く取するために最終的には国家権力そのものの本質を突いて行けるところまで成長した運動が、あくまでも組織ないしは党派による闘争ではなく、運動そのものが「運動体」を逆に形成していったのが全共闘運動の本質であったと言える。

日本におけるそれらの闘いの一つの契機となった六八年五月のバリの闘いもまた、既成の組織を乗り込めるところから始まった。既成の左翼は、自らの側に引き寄せるためにのみ彼らの闘いの目標を合わせ、

それはつまるところ自らの組織以上の闘いが自然発生的にせよ巻き起こった時には、はつきりとそれをおさえ、弾圧する側に回るということがその過程で明らかされた。相前後して、全世界でステューデントパワーという形で同じ様な形態の闘いが開始され、それぞれの立場の人間が決定的にどこに自分を置くかという問題が問われていったのである。

その中で個別大学においては、当局、一般学生、日共民青、全共闘といった形で分化がなし切れ、それぞれが、それぞれの動きをしていくことになる。

大学とは実は、日帝という一つの体制の一環としてあり、それは限りなく消費される労働力商品と、ある一定レヴェルの質でもって再生産していく工場としてあり、それを見抜くことによって、背後にひかえる権力そのものを可視化していった。その象徴的なものとしてバリケードがあり、バリケードを通すことによって、初めて敵とは何かが見えて来たのである。そのバリケードの中の「解放区」は自らもまた変革しめく意志を持ったものによる、文化・社会・経済・政治を貫くあらゆるものへの反逆を必然化した。今まで依拠していた立場が、実はどこにあるかが鮮明になる——このことの恐ろしさはまた、そういう立場に置かれていたことに対する怒りとして闘いへと結実したのである。

その過程で大学当局は「正常化」を成し切るために機動隊の導入を行ない、闘いの初期においては闘う学生に耳を傾けていた教官たちも、あまりに自らの足許を決定的に問われたが故に、それを弾圧する側に直ちにつき始めた。日共民青は学内の武装私兵として、逆バリ↓

「民主化棒」による全共闘運動への武装敵対を繰り返していた。

この中で、既に六七年八月の闘いで公然と武装した闘う学生は、大学までの教育体系の中で、また家庭―地域の中でみごとにつちかわれてきた暴力に対するアレルギーを払拭し切り、大学を解体し自ら一人一人が武装していく闘いへと決起し、自己が学生であることの意味を問い始めた。その結節点として六九年東大安田塔の攻防戦はあったのである。

中期全共闘運動は、主として関西を中心とした大学の闘いといえる。ここに至っては、すでに秩序派なるものが登場し、東大決戦以降主要な敵として見えて来た国家権力のみならず、大学当局を軸にした学内治安体制の確立が成され始めていた。それは武装私兵としての日共民青や日本大学のように、右翼暴力団などの物理的な当局自前の弾圧の他に、そろそろ「正常化」を望みはじめた一般学生が多数派として定着しはじめたことに拠る。これらが大学秩序の回復という形で、今まで問われたものを一切反古にして、闘争の圧殺に乗り出して来た。

そういう情勢の中で、なおかつ闘い抜かれた京大などのバリケード闘争の中で、全共闘運動自身がなにをなすのか、つまるところこの闘いを更に階級闘争として闘い抜くのか否かの答を出すことを迫られていく。

ここに至って、個別学園闘争として発生した全共闘運動は、対権力闘争として全面化され、全人民的闘いとして高まっていく。が一方において、日常化した右翼と民青とのゲババトルの中で権力そのもののかすみ始め、反民統一戦線のイメージと、集会・街頭武装カンパニアを中心としたスケジュールこなしが、主な闘いとしてすり変わって行く

傾向が運動の流れ全体の中に発生していく。

それとは別のレヴェルで、第二義的にはあれ、全共闘運動の内実としての八反大学V運動が一定程度の結果を見せ、自主講座運動をはじめとする文化革命を垣間見せたという成果はあった。逆に、自己否定の運動を単純に学生存在の否定として、「学生部隊」突出部分——労働者「本隊」論の裏返しの、あっさりとして大学を去る部分も発生する。

後期全共闘運動は、なすべきことを後まわしにしたまま崩壊していく、まわり道的運動の繰り返しで終わった。全国全共闘の結成は、すでに無党派が自らの政治潮流を自立させ得ないまま、ただ単に党派間のクッションとしてしか存在し得なくなった状態の中で、八派共闘として、数年を経ずして空中分解するのは必然的なものであった。

三 現在の二、三の課題

以上簡単に見て来た、全国レヴェルでの全共闘運動の歴史を踏まえて現在を見るならば、IIにおいて仮に分けて見た後期の運動の延長線上にありつつも、すでに中期の総括の中で出てきた様々な問題を何ら実体化するところもなしに、ズルズルと退潮して行ってしまう以降の、全くの混沌の中に現在はある、としか言いようがない。中期において見えて来た問題は一口で言えば、軍事の問題と政治（又は政治性）の問題であった。そのことは無党派が無党派として生き残り、かつ運動実体として動き続けられるだけの主体を確立するに当っての最低限の必要事項としてあったはずである。軍事の問題としては、まず、やっとならば見えて来た権力そのものとの対峙、攻撃を成し切れるだけの武装

の質そのものの獲得、そしてそれ以上に「無党派潮流」＝「無党派」党派として、対党派関係の中で、既に党派シンパ＝党派予備軍の域を脱し切り、明確な形の潮流として存在していた無党派運動にとつて、当面党派との運動現場での対峙に耐え得るだけのゲバルトの質を獲得する必要がある。この段階で市民運動的な個別闘争を闘かう部分と分岐する過程を何回か通過しつつ、残った部分は、最終的に他党派と対峙し得るだけの軍事力を付け切った。政治問題については、他党派との理論レベルでの相対性を獲得した程度でしかなく、全体として他党派との軍事的、政治的自立は成し切ったが、党派別軍団的運動パターンの中で一つの「集団」として定着したにすぎず、今に至るまで、初期全共闘運動に見られた文化の質も、政治闘争の質も、何ら全学連運動＝ポツダム自治会運動の質を乗り越えたものとはなっていない。

たとえば、それをOSL（自由社会主義者評議会・準）のような運動の中で見ようとすると、無党派の発生を見て、「これこそアナキズムの発現だ」と楽天的な見方で全く情勢を読み違えて、とんでもない見当違いな運動を始めてしまうことになってしまふ。全共闘運動は全共闘運動であつて、その同じ質の総括の上に別個にOSLをつくる必要などなかったのだ。このことが決定的に、現在無政府主義の影響下にある運動がほとんどないことを生み出したと考える。「労働者を解放するのは労働者自らの仕事である」この言葉を他の何かに置き換えても普遍性を持つことは確かだけれども、活動に関わる人間がその程度の認識では全く不足だったのである。無政府主義運動は大量運動ではない。その確認を欠落させたところで運動に関わるならば、大衆を

解放する闘いの中で、自らも大衆の一人としてと言つて見たり、逆にブランキズム（ブランキの思想そのものではなく、今使われている意味で）的に叫んだりしてしまうことになる。少し言い回しが複雑になつて来たが、大量運動は、全共闘運動も含めて、無政府主義運動にはなりえない。そのことを踏まえて大胆に次の段階、つまりアナキストとしての運動を開始すべきなのである。このことが、本来的な政治性の獲得である。

言うまでもなく、それは一般的に部隊として登場することではなく、大衆戦線に深く潜り込む中で、その影響下にある部分を作り出して行くことである。当面の我々の総力はその作業を成し切る為の戦術部隊の創出に向けて注がれるべきだろう。その過程で強固な思想性を築いていくことが具体的な問題として出て来ることはあつても、研究サークルの趣味の思想を最初から力んで獲得する必要はない。

これを一つの当面考えるべきこととする。このことはすでに、武装の質の問題も含めて数年も前にある程度の答が出ていたにもかかわらず、主要にはその武装の問題を決定的に回避してしまつたが故に、ほとんど成し切られていないこととして現在もなお最大の課題としてある。具体的なレベルでは、個別の戦線で煮つめることであつて、ここで触れるべき種類のものではないだろう。

さて次に、感覚的なことなので一般的には言い切れないが、我々の活動に関わつて行く時の姿勢について。先刻の問題とは逆に、余りにも無政府主義者たらんとしていて、自己を他と妙に区別しすぎてしまふ傾向があることは確かだ。「それはボルの考えだ」という風な発想。たとえばスターリンの批判をもつてそう語るなら、それはマルク

ス主義の陣営においても反スタ・マルクス主義として既に定着している。反スタ・マルクス主義（＝反スタ・スターリニズム）の批判として自らの立場を置いてみたところで、既に八派以降の登場部分、とりわけ無党派系の多くの部分が、それを乗り越えたところでマルクス主義を撰取し、運動の中に取り込んで闘っている。全共闘運動の総括の上に立つて、なおかつ無政府主義者たらんとするのであれば、その地平を踏まえたところで語らなければ、OSLよろしく、「反スタ・マルクス主義を止揚」するものとして登場しても、バスはもう遠くを走っていることになるのである。

私自身はそれを、自ら立場を分つよりも、共に無党派運動を闘つて来た同志として更に互いの批判をなし切り、それを具体的な運動の中で展開する事なしには、アナキズムは全共闘運動の総括の中で生き残つた思想としては存在し得ないだろう。

そのことを今一度自ら問い直し、更に深く無党派の中に根ざして行くことが、我々の側からの全共闘運動の深化となるはずである。

現在の運動状況を突破するのはこれだけでは全く不十分である。しかし最低このあたりは踏まえておかないと、思想以前の問題としてお話にならないと思う。

より具体的なことを語りたいが、本誌の性格上気がひける。より詳しく語り合いたいものだ。

× × ×

一九七六年 第四回

夏のキャンプ

CIRA・NIPPON

各地でさまざまなかたちで活動し、また相互にコミュニケーションしている仲間たちが年一回集まり、共同で生活し、仕事と学習をおして親睦を深める機会とする。△研究▽といふより、むしろもっとソフトな、いわば夏の△忘暑会▽といった感じのリラックスした集まりをイメージしてほしい。（企画書・「キャンプの意義」より）

概要

- 日時 8月7日（土）～8月15日（日） 6日設営準備
- 場所 静岡県富士宮市 16日後片付け
- 内容 ワーク（整本・カード作成・蔵書目録作成） セミナ
- （戦争抵抗者インター日本の活動／共同体運動／弥栄／地域合同労組と労運／共同保育／反公害運動／使い捨てを考える）
- はかーエスベラント講座／映画／ミニコミ講座……
- 主催 CIRA・NIPPON（アナキズム研究センター）
- 事務局 東京都文京区春日1-2-17 1506 広瀬慎二方
- 連絡先 東京・同 右

- ・世田谷区梅ヶ丘2-18-11 千春荘
- ・山部嘉彦（TEL03-427-8315）
- 京都・左京区田中門前町28-5 羽熊直行
- （TEL075-721-4507）
- 静岡・富士宮市中里700 中村隆司
- （TEL05442-711905）